選考委員特別賞
那須正幹賞

「想い」

広島市立大塚中学校　二年
阿波　さくら

今年も文化祭の季節がやってきた。中一で私はパートリーダーをやり、今回挑戦する役割は文化祭実行委員。中一で学んだことを活かして精一杯やりきろうとはりきっていた。

私のクラスの人達は、いつも明るい。しかし、たまにクラス内でマイナス発言が出てくることもあることから、合唱練習がうまくいくか不安だった。しかしパートリーダーも、文化祭実行委員を一緒にしている男子も、私と同じ思いだと思いながら練習開始。

九月二十八日から十月四日まで各パートに分かれて歌練。それから、十月五日から合唱練習に入った。全体的には上手くいっていると思った。

九日の放課後。これからの合唱練習について話し合うため、パートリーダー会を開いた。そのついでに各パートの状況もきくことにした。

「最近の合唱練習はどう？何か不安なこととか、心配なこととか…。」

「やっぱり男子はさぁ、やる気ない人いるでしょ。男声パートリーダーが注意しないとさぁ、やばいって。」

アルトのパートリーダーが苦い顔で言った。それに対して男性パートリーダーは、

「だって言ってもさぁ、きいてくれんじゃんか。」

と、グチグチ言ってくる。それに対して、私は腹が立ってこんなことを言ってしまった。

「ねぇ、まだちゃんと注意したことないでしょ。注意して聞いてくれなくてなんなの。どういう覚悟で、リーダーをやってるの。」

そこから少しだけ沈黙が続いて、私は半ギレしながら話

し合いを進めて終わらせた。

その後は一人で（いつもは友達とだが）家に帰ることにして、歩きながら色々考えた。（リーダーを軽い気持ちでやっているんだったら、やめてしまえばいいのに。もっと私を支えてほしい。）

だけど後々、自分はかなり厳しいことを言ってしまっていたことに気づいた。もしかしたら、「リーダーは大変だけど一緒に頑張ろう」とか、素直に「私を支えてほしい」と言えばよかったと思った。傷つけてしまった…？そう思うと、心が締めつけられて涙があふれた。何で考えて発言できなかったのか。反省した一日だった。

その後、男性パートリーダーにも声かけが増えた。そして、クラスの合唱もレベルを上げていき、みんなと歌うことに楽しさも覚えた。担任の先生は、レベルが上がったと同時に、クラスに新たな課題を与えた。

「この曲にもっと『気持ち』をのせて歌ってみてくれる？」

曲の中から歌詞をあげて、この時はこう歌うといいと先生は言った。だが、そこでトラブルは起きた。一部の男子たちが先生の話を聞かずにフザけていたのだ。そして先生は怒り

「もういいです。」

と言ってその日の合唱練習は終わってしまった。でも、このまま中途半端な気持ちで私は終わりたくない。この曲を大切に歌ってほしい理由が、私にもあった。その気持ちを、クラス合唱の反省会で言うことにした。

その日のクラス合唱の反省会のこと。ソプラノ、アルト、男声、それぞれのパートリーダーが反省を言い終わって、私の言う出番が回ってきた。この前のパートリーダー会の時のように怒らずに冷静になって…。

「このクラスの合唱は日々成長しています。今日先生が言われたように歌詞に思いをのせること…って、大切だと思います。私はこの合唱曲の紹介文を書くのに二週間かかりました。…正直、この合唱曲の紹介文を書くことは、難しかったです。なぜかというと、この曲の歌詞のどこをとっても、いいところばかりだったんです。それ

を百二十字にまとめるのが難しかったんです。書いてる時に、どんな思いで作曲者が書いたのかも調べました。『思春期の人たちに向けた応援メッセ―ジ』だったんです。だから、作曲者の思いを知ったからには、私はこの曲を…軽い気持ちで歌えません。だから、しっかり歌詞の内容を考えて、これからも頑張りましょう。」

たぶん、私は気持ちを伝えることができたと思う…。明日の合唱は、どう変わってくれるのか…。みんなはどう感じとってくれたのか。

合唱コンクールまであと二週間…とても早く時間が進んでいるように感じた。時間が進むと共に、私は自分の歌声に違和感を覚えた。私のパートはソプラノで高い音も多く出てくる曲だった。高い声をのばした時に声がかすれて出にくい…。のどが痛い…。そんな悩みを抱えてでも、声を出す努力はした。

日々みんなが努力をするたびに、日々合唱もよくなっていった。本当にそのたびに成長を感じる。強弱がつけれるようになったり、音程を正確にして歌えるようになったり、声量も最初と比べたら、本当に大きくなっていた。すごくうれしい気持ちになれる。それから、合唱をすることがとても楽しく感じた。みんなのやる気を壊さないように、心がおれないように、パートリーダーたちはアドバイスをするとき、「優しくていねいに」ということを忘れずに、みんなを引っぱってきてくれている。そんな姿にも私はうれしくなった。

しかし、日が過ぎるたびに私ののどにも限界が近づいていた。痛いけどがまん、苦しいけど私はここで立ち止まりたくなかった。今ここで私が立ち止まったら、みんなが頑張ってくれているから、足を引っぱってしまうのではないかと思ったから。毎日自分に、「頑張れ、頑張れ」と言い聞かせたが、少しずつ精心的にしんどくなってきた。

ある日の音楽の時間。クラスの合唱を、音楽の先生に聞いてもらった。そして先生は、ソプラノを歌っている私たちに言った。

「ソプラノ、よく声出てるよ。」

しかしソプラノのパートリーダーは、それと逆のことを言った。

「阿波さんの声しか聞こえないんだけど。みんなもっと声出してよ。」

そう言われて衝撃を受けた。

「ねぇ待って…。今まで私の声しか聞こえてなかったわけ？」

私はそうパートリーダーに聞いてみた。

「うん。」

当たり前のようにパートリーダーはうなずく。周りがあまり声を出していなかったこと…そのことに気づかなかった自分にも衝撃を受けた。

音楽教室から自分のクラスに移動しているとき、アルトのパートの友達にさっき受けた衝撃を話すことにした。

「ソプラノの声って私の声しか聞こえてなかったの？」

そして友達は「う〜ん」と言って、

「まあ確かに今までずっと、あなたの声しか聞こえなかったよね。それで？」

「今までずっと？」

「今までずっと。」

「やっぱり。私の声しか出てないことに今日気づいてさぁ。衝撃だったっていうか。」

友達は「なるほどねぇ」と言って、

「まぁ実際に合唱を抜けて聞いてみないと、そういうのは気づかないよ。」

その時私はふと思った。合唱を抜ける…？私が…。そしたら、どれぐらいソプラノがでてるのかが分かると思った。だけど…。

「合唱、私が抜けたらソプラノは小さくなるよね…。」

「そうだけど、声が小さい分、それだけあなたにソプラノのみんなが甘えていたってことになるけど？」

友達の言う通りだと思う。

それから私は合唱を一度抜けて聞くか聞かないかで、ずっと葛藤していた。私が抜けたらソプラノの声は小さくなるということ。ということはソプラノのみんなが私

に甘えていた…。甘えていたということは、私が甘やかしていたということ?その現実だということが怖い。私は今までの練習をふり返る。

「もっと声出したら、ソプラノはよくなると思う。」

その言葉を私は何度もソプラノのみんなに言っていた。でも、それに対してソプラノのみんなの答えは、

「のどが痛い。」

「音が高すぎる。声出ないよ。」

そんなマイナスな言葉ばかりだった。その言葉を何度も聞いてきた。耳が痛くなるほど。それでも私は「のどが痛い」と弱音を吐かずにやってきた。内心傷ついていたが。

もしかして、それが甘やかしていたということだったのかもしれない。「私も痛いからもっと頑張ろう」とか「そんなことであきらめないで」と言えばもう少し変わっていたと思った。ソプラノのみんなの弱音を「そうだね」と言って流していた。「そうだね」と言って流しても、成長できない。私が…甘やかしていた。そう考えていると、担任の先生に話しかけられた。

「今、ソプラノの人たち…もう少し声出ないの?」

「あぁ…。前よりかは出るようになったんですけどね…。」

おどおどと答えてしまう。先生からも衝撃の一言を言われた。

「阿波さんの声しか聞こえなくてさあ。」

ですよね、としか言えない状態…。でも、私が合唱を抜けてソプラノのみんなが成長してくれるんだったら…。そう思うと、ようやく決心がついた。

暮会前。ソプラノのパートリーダーに、私が合唱を一度抜けて聞いてみると言うことを伝えた。すると、ソプラノのパートリーダーは、

「うん。その方が絶対いいと思う。」

そう言ってくれた。私が抜けたら、ソプラノの声は小さくなる…だからもっと声を出さないといけない、そう思ってほしかった。ソプラノのみんなには…。

暮会中、ずっと合唱のことを考えていた。そしたら隣

の席の男子に心配された。その時私はヒドく疲れ切った顔をしていたらしい。確かに…しんどかったから。

そしていよいよ合唱練習。一回目は一緒に歌って、二回目からは合唱を抜けて聞いた。ソプラノの声の大きさは、自分の想像をはるかに超えていた。ソプラノの声が…聞こえない。アルトの声と男声の声の波にのみこまれたような…。あまりにもヒドすぎてショックだった。途中で伴奏を止めてほしかったぐらい。ソプラノの声が聞こえない分は私が甘やかした証拠だった。そして、何よりもショックだったのは、口もまともに開かず、頑張って歌おうという気持ちが感じられなかったことだった。私はクラスのみんなの前で、泣きたくないから涙をずっとこらえていた。

合唱を終えて、今日のクラス合唱の反省会が始まった。各パートリーダーが一言ずつ言っている間、色々なことを考えてしまっていた。みんなの前では泣きたくないし、でも自分の気持ちはちゃんと言わなくてはいけない…。そんなことを考えている間に私の言う出番が回ってきた。手汗がすごくて、心臓が飛び出るぐらいドキドキしていた。でも、言わなくてはいけない。

「あの…。」

そう言った瞬間、泣いてしまった。隣にいた男子の文化祭実行委員に笑ってごまかそうとした。だけどもう泣いてしまったから、言うしかないと思った。

「あの…。何て言うか。……ソプラノの声が出てなさすぎて…。驚いたんですよ。…私は、今まで音楽の先生に『ソプラノ声出てるね』って言われてたから安心してたんですけど、担任の先生やパートリーダーに、私の声しが出てないって言われた時も衝撃で…。だから、時々迷ったんです。合唱を抜けてソプラノの声が出てるかどうか…聞くか聞かないかで…。でも、私の声が大きいんだったら、私の声でソプラノを引っぱれると思ったから抜けれませんでした…。それは全て、私が甘やかしてしまったと同じで…反省しました。」

ここから、私はとんでもなく自分の感情をストレートにぶつけてしまった。

「でも、この曲は高い所が多く出てくるのは分かる！そこで『高い音が多すぎて高い声が出せない』とか『のどが痛い』とか言って、あきらめないで下さい。もう、そんな言いわけは聞きあきた。私だって、大きい声出して歌えるけど、本当はのど痛いし、高い音で声出してのばしたら、声がかすれる。それでも出す努力はしている。男子だっていつもたくさん声出してくれてるけど、あんなに声出して…のどが痛いなんて言わない人は絶対にいない！ソプラノはしんどい…私にだって分かるよ。でも苦しいのは私たちだけじゃないってことを…忘れたらいけない…。できない人たちの集まりじゃないから、もう少し頑張りましょう。」

話し終わった…。言いすぎたと思った。自分の言ったことがマイナスにならないか…とても不安だった。そして、担任の先生からも一言があった。

「はっきり言って最悪です。でも、このクラスの心が、今はバラバラでも当日には一つになると、先生は信じています。」

そして先生は涙を流しながら言った。

「一つになるまで、あきらめない。明日からまた切り替えて練習して下さい。」

私はその日の夜。たくさんの想いが心の中に詰まっていて、色々なことを考えて…とてもつらくなった。明日からどうしたらいいのか分からない…。

どんよりした、いつもより目覚めが悪い朝。とぼとぼ学校に行き、とぼとぼ教室に入った。そうすると色々な友達が声をかけてくれた。

「昨日は考えさせられた。色々ごめん…。もっと頑張るから。」

そして男子の友達も声をかけてくれた。

「昨日はアレ…男子が聞いても泣けるわ…。ガチで共感した。」

色々な人たちが、そうやって考えてくれたことがうれしくて朝から泣きそうになった。

そして、それからの私のクラスの合唱は、驚くほど成長した。本当に、自分の気持ちをクラスに伝えたこと…

それは正しかったのかもしれない。

十月二十七日、文化祭当日。今日でこのクラスと、この合唱曲を歌うのは最後。どこか寂しい気持ちになる。二年生の合唱の発表が始まる前の休けい時間に、クラス全員で円陣を組んだ。男子二人の

「絶対最優秀賞とるぞー！」

と言うかけ声に

「おー！」

と私たちは答えた。このクラスは一つになった。

そして、いよいよ私たちの出番が回ってきた。ステージに上がって個人の位置に立つ。指揮者、伴奏者が礼をして、指揮者は台の上に立ち片手をスッとあげた。そして伴奏が流れ、美しい音色が体育館に響き渡る。そこから私たちは、強弱をしっかりつけ「想い」をのせて歌った。喜びや悲しみ、怒りや憎しみ。そして私は、今までのことを思い出しながら歌った。そして曲は終わりに向かっていき、みんなで「想い」を爆発させた。歌い終わってからたくさんの感情があふれ出た。この曲をこのクラスで歌えてよかった、でも最後なのが悲しい。

そして、各学年の発表が終わり、文化部のステージ発表も終わり、緊張の結果発表。

「二年生、優秀賞は…」

結果発表の時、みんなと手をにぎった。大丈夫…。絶対最優秀賞だから…。

「…1組！八組！」

えっ？！八組？！（八組は私のクラス）みんなでおどおどしてしまった。ありえない…。

最優秀賞は他のクラスにとられ私たちはトボトボと教室に戻る。教室に入った時、

「机さげて！写真とるから！」

急に先生が大きな声で言った。全員で机をさげて、みんなは合唱体形に並び、私と男子の文化祭実行委員は賞状と盾を持って真ん中に並んだ。静かになったとき、先生は机の上に立ちカメラをかまえたが、スッとおろして言った。

「最優秀賞とれなくてくやしかった人。」

クラスの中のほぼ全員が手を挙げた。もちろん私も。そして先生は涙を流しながら言った。

「先生もくやしいよ！」

そして女子も男子も、色々な人が泣いた。私も思わず泣いてしまった。

「泣いたら写真とれない！」

と誰かがツッコミ、少し笑ってしまった。先生は何枚か写真をとり机からおりた。そして、パートリーダーたちからコメントを言ってもらい、指揮者、伴奏者、男子の文化祭実行委員が言った。…そして最後に言うことになったのは私だったから、尚更困ったが素直な気持ちを伝える。

「お疲れ様でした…。やっぱり最優秀賞を他のクラスにとられたのはくやしいです。でもみんな頑張ってくれた。今日がこの曲歌うの最後だけど…。こんな私についてきてくれたことがうれしかったです。ソプラノには厳しいこと言ったし、怒ってしまったり…。毎日反省の日々でした。本当に色々…勉強になりました。本当に…ありがとうございました。」

ありがとうと何度言ってもみんなには感謝を伝えきれない。団結できるってすばらしい。私は幸せ者。私はクラスのみんなに最優秀賞を超えた賞を送りたい。心の底から思う、みんなと輝けてうれしかった。

人間は誰でも、心に色んな「想い」を持って生きている。